

## 大伴家持と梅花の宴

はじめに

大宰府で父大伴旅人が、「梅花の宴」を催したのは天平二年家持十三歳の時であった。少年家持が梅花の宴で詠んだ歌は存在せず、大宰府での歌も万葉集にはない。しかし「梅花の宴」の出詠歌に類似した歌が家持の初期の歌にあることや、梅花の宴追和歌の作者の一人として家持が挙げられること、越中歌壇の創出など、この宴が、歌人家持の形成に少なからず影響を及ぼしたと思われる。

○家持は天平二年春正月の梅花の宴の時、大宰府にいたのか。  
○初期作歌に見られる梅花の宴の影響は何を意味するのか。

○「大宰の時の梅花の宴追和歌」は誰の作歌か。

○卷一七巻巻頭歌—大宰府関連歌群—に始まる家持の歌日誌という疑問を追っていきながら大伴家持と梅花の宴の関係を考察していく。

一、梅花の宴開催時、大宰府に大伴家持はいたか。

島 田 裕 子

(1)

正三位大伴旅人六十三歳、大宰府への赴任は神龜四(七二七)年一二月頃(五味智英「大伴旅人序説」『万葉集の作家と作品』岩波書店 一九八二年)頃と考えられる。旅人は、正妻大伴郎女を伴うが、筑紫に下ってしばらくして郎女は亡くなってしまふ。旅人は長年連れ添った正妻を失い悲嘆にくれる日々を過ごすなか、追いつけかけようように弟であり異母妹坂上郎女の夫大伴宿奈麻呂が亡くなったという知らせを京より受ける。

大宰府師大伴卿、凶問に報ふる歌一首

禍故重畳し、凶問累集す。永に崩心の悲しびを懐き、独断腸の涙を流す。ただし、両君の大助に依りて、傾ける命をわづかに継げらくのみ。筆の

事をつくさぬは、古にも嘆くところなり。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

神龜五年六月二十三日 (5・七九三 大伴旅人)

と、親しい人達が亡くなった悲しみを「世の中は空しいこと」と知ってはいしたが、身に染みて知る時、ますますもって悲しくなるものだと嘆き、都の留守を任せていた近親（おそらく異母弟稲公や甥胡麻呂であろう）に、歌を送るのである。

遠く大宰府に来て、つきつきに妻や弟を亡くした大伴旅人にとって、山上憶良が筑前（福岡県の西北部）国守として赴任していたことは救いであった。旅人六十三歳、憶良六十八歳か。ともに筑前と大宰府に赴任してきたことで親しく詩や歌を送りあうようになる。ここで六十歳を越えたふたりが、孤独を埋めあうように歌や詩を競い合い、漢詩文と和歌をならべた形態を作るなど次々に新しい試みに挑戦してくのである（伊藤博『萬葉集釋注三』有斐閣）。この出会いがなかったら、旅人も憶良も万葉集を代表する歌人にはなれなかっただろう。彼らを中心に大宰府の官僚等も交じって「筑紫歌壇」と後に呼ばれるグループが形成されていく。

そのころ、平城京では政変が起きていた。神龜五（七二九）年九月、藤原不比等の娘光明子が産んだ皇太子基皇子が病で崩御された。翌神龜六年二月に、権勢をほこっていた左大臣長屋王が謀

大伴家持と梅花の宴

反の企てありという讒言により、政府軍である六衛府を率いる藤原宇合のもと捕縛、妃吉備内親王と膳夫王ら四人の息子たちは縊死させられ、長屋王は自害させられた。この長屋王の変は、不比等の息子たちの素早い動きによって鎮圧される。同年三月不比等の長男藤原武智麻呂が大納言になり、八月には不比等の娘光明子が立后。天平と改元する。ここに、藤原氏の権勢は絶対的なものとなる。京の政変がまだ落ち着いていない天平二年正月一三日、大宰府では九州全域の国司らを集めて梅花の宴が催されるのである。

(2)

さて、梅花の宴開催当時、大宰府に家持は来ていたのだろうか。

これについては確かな記載はない。万葉集4・五六六〜五六七の歌「大宰大監伴氏百代等、馭使に贈る歌」の左注に以下の記載があるのみだ。

以前は、天平二年庚午夏六月に、帥大伴卿、忽ちに瘡を脚に生し、枕席に疾苦ぶ。これに因りて馳駆して上奏し、庶弟稲公・姪胡麻呂に遺言を語らまく欲しと望ひ請ふ。右兵庫助大伴宿禰稲公・治部少丞大伴宿禰胡麻呂の兩人に詔して、馭を給ひて発遣はし、卿の病を省しめたまふ。しかるに、数句を

経て、幸に平復すること得たり。時に、稻公ら、病すでに癒えたるを以て、府を発ち京に上る。ここに、大監大伴宿禰百代・小典山口忌寸若麻呂また卿の男家持ら、やくし 駅使を相送り、共にひなもり 夷守の駅家に至る。聊かに飲みて別れを悲しび、乃ちこの歌を作る

天平二年六月の歌のこの左注に「卿の男家持ら」（卿男家持等）と、家持の名が初めて記される。左注によれば、この時点では家持は大宰府にいたことがわかり、「家持ら」とあるので弟書持や妹留女乃郎女も一緒にいたらしいことがわかる。

この左注をもとに推察するのみであるが、その主なものとして次の二説に集約される。

①家持は当初から大宰府へ伴われた。

そのため旅人の正妻大伴郎女の逝去の後、家持他その弟妹の世話をするために家刀目として大伴坂上郎女が京より来ることになった。

②家持は在京。天平二年六月の旅人が重篤になった際に、大伴稻公や胡麻呂らとともに、大伴坂上郎女と家持は大宰府に下った。

二説ともに疑問に思うところが残りどちらとも決め難いが、以下の点から①であると推察する。大伴旅人は、辛巳事件より長屋土（皇親勢力）と藤原四兄弟（藤原氏）との間の確執に不穏さを感じ

じ取っていたはずである。藤原不比等亡きあと長屋王が政治の中樞を掌握して左大臣にまで昇格していた。長屋王は天武天皇の皇子高市皇子の子で、妃は元正天皇や文武天皇の妹吉備内親王である。嫡男膳夫王は皇位継承の可能性もある。不比等の息子たちはまだ若く、政治の中心は皇族であり政治力もある長屋王に移っていた。これは藤原不比等の子供たち、武智麻呂・前房・宇合・麻呂や光明子にはおもしろくないものであった。この藤原四兄弟と長屋王の政治をめぐるせめぎあい<sup>せめぎあ</sup>が激しくなるなかで、大伴旅人も政務の中樞に参画しており、それ故不穏な事態が起こる恐れを抱いていたのではなからうか。旅人が大宰府の帥として、都を遠く離れることは長屋王と四兄弟の権力争いが遠因であることも感じとっていただろう。このような時期に大伴家の嫡男家持を京に置いていくだろうか。妻子ともども政争に巻き込まれる恐れもあり、正妻大伴郎女とともに家持兄弟らも連れて行ったと考えるほうが妥当ではなからうか。

## 二、初期作歌に見られる梅花の宴の影響

うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも  
(8・一四四一 大伴家持)

この歌は家持のもっとも初期の歌と見なされているものの一つである。作歌年月が記してないが、巻八の歌の配列より天平四年

か五年に詠まれた歌と考えられる。家持が養老二年（七一八）生まれとして十五・十六歳の歌である。（林田正男「大伴家持管見―内舍人任官をめぐる―」『国文学』昭和四五年二月、小野寛『大伴家持研究』笠間書院一九八〇年）これは作歌年代が明らかでない初作歌、天平五年作の「振り放けて三日月みれば一目見し人の眉引き思ほゆるかも」（六・九九四）より以前か、同じころに詠まれた。初作歌は他に八・一四四六、八・一四四八とがあり、全部で四首である。ここで一四四一歌に着目したのは左記の梅花の宴席歌の影響が色濃いことによる。

天平二年春正月の梅花の宴の歌

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ

(5・八二三 大監伴氏百代)

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐひす鳴くも

(5・八二四 少監阿氏奥島)

この二首と当該歌を見比べるときわめて表現や発想が類似している。5・八二三歌の傍線部を上句に、5・八二四歌の傍線部を下歌に置き換え「しかすがに」ということばでつながり合わせて和歌の韻律を整えただけのような歌である。新鮮味は朦朧と雪でかさんだ風景の表現、「うち霧らす」雪景色の表し方である。

「しかすがに」ということばはあまり用いられないことばで集

大伴家持と梅花の宴

中四例しかなく以下のとおりである。

○「しかすがに」の歌

梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に降りしきりつつ

(10・一八三四 作者未詳)

風交り雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さりにけり

(10・一八三八 作者未詳)

雪見ればいまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ

(10・一八六二 作者未詳)

うちなびく春さり来ればしかすがに天雲霧らひ雪は降りつつ

(10・一八三二 作者未詳)

『萬葉集全註釋七』では、当該歌が、「卷の十の春の雑歌の、シカスガニに依る形式の歌の影響を多量に受けている」と指摘している。

歌字びともいうべき初作歌は先行歌の影響を強く反映しているものだが、ここで「うち霧らし」という表現は万葉集中一例で家持の造語である。万葉集中には「天霧らし」「かき霧らし」という表現はあるが「うち霧らし」ということばはない。10・一八三二作者未詳歌の下句より発想を得た表現だが家持独自の趣向を示すことばである。

次に〈我が園の鶯 山野の鶯〉について、

梓弓春山近く家居らば継ぎて聞くらむうぐひすの声

(100・一八二九 作者未詳)

等の歌があり、鶯は集中、約五〇例もある。内訳は、梅花の宴七例、巻十作者未詳歌に一八例、赤人二例、田辺福麻呂二例、家持十一例、家持との贈答歌二例 卷十三他に見られる。

初作歌に見られる梅花の宴の影響は何を意味するのであろうか。初作歌はまだ習作であるが、そこに家持という歌人の歌の世界の好みや特性がすでに現われている。梅花の宴の歌が初作歌に色濃く反映しているのは、家持にとって梅花の宴に特別な思いがあったことのアラわれであろう。梅花の宴の後、父旅人は大納言に昇進し帰京。翌天平三年、正月従二位拜受、同年七月に六七歳で亡くなる。家持は一四歳で父を失い大伴氏を束ねる家系の嫡男としての責務を負わねばならなかった。梅花の宴は少年家持にはなやかな宴に接する初めての機会であり、大宰府での父大伴旅人の権威とその文人としての在り方を記憶に留めるものであった。

### 三、「大宰の時の梅花の宴追和歌」

大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首

三冬みふゆ継つぎ春は来きたれど梅の花君にしあらねば招まねく人もなし

(17・三九〇一)

梅の花み山としみにありともやかくのみ君はみれど飽あかにせむ

春雨に萌えし柳か梅の花共に後あれぬ常の物かも

(17・三九〇二)

梅の花何時いつは折らじと厭いとはねど咲きの盛りは惜しきものなり

(17・三九〇三)

遊ぶ内の楽しき庭に梅柳折りかざしてば思ひなみかも

(17・三九〇四)

み苑生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ

(17・三九〇五)

右、十二年十二月九日に大伴宿禰書持作る。

(17・三九〇六)

梅花の宴の追和歌に先のような歌群がある。作者は、家持の同母弟、大伴書持とあるが、家持作と記している写本が多い。

『元暦校本』(平安末期頃)以外の『類聚古集』(成立一一二〇年以前 但し現存写本は年代不明)も含め、仙覚本系統の西本願寺本、冷泉家本系統の広瀬本など現存全古写本には「大伴宿禰家持作」とあり、また西本願寺など大部分の写本には「十一月九日」と記される。

書持作となったのは窪田空穂氏が『万葉集評釈』で家持の歌より粗野で明らかに異なる趣きがあると指摘されて以後、各注釈・全集に書持作と記すようになった。

この追和歌群の特異な表現を手掛かりとして特色を掴み作者に

近づくことができないうか。17・三九〇二の「ありともや」は集中にこの歌しか例がない。また、「招く」も集中四例しかなく、「遠久」(17・三九〇一 当該歌書持或は家持)、「呼久」(17・四〇二一 家持)、「乎伎」(19・四一九六 家持)、「乎伎」(19・四一七四 家持)と家持・書持兄弟しか用いない表現である。次に「飛び上がり」(飛上)は集中当該歌しか例がない。これらの特異な表現の中で「招く」は家持・書持の間でのみ用いられたことがわかり、このことより二人の歌の影響関係はあると考えられる。

さて、家持自身の作歌として明らかな追和歌を紹介しよう。

筑紫の大宰の時の春苑梅花に追和する一首

春のうちの楽しき終へは梅の花手折り招きつつ遊ぶにあるべし

(19・四一七四 大伴家持)

右の一首二十七日に興に依りて作る。

追和筑紫大宰之時春苑梅歌一首

春裏之 楽終者 梅花 手折乎伎都追 遊尔可有

右一首、廿七日依興作之

この追和歌、「興に依りて作る」という左注も付き創作意欲につき動かされて家持が作歌したものである。天平勝宝二年、家持三三歳の作。以上、家持と梅花の宴との関わりを歌で見ていく

大伴家持と梅花の宴

と、梅花の宴の影響を受けた初作歌に始まり、書持か家持作か判明しがたい卷一七の歌群、そしてこの追和歌と梅花の宴をしのぶ歌は歳月を越えて歌いだされるのである。

#### 四、「追和歌」について

(1)「追和」の由来

「古人の詩に追和するのは、即ち東坡より始められ」と『大漢和辞典卷十一』にはある。蘇東坡は一〇三六年に生れ一〇一年に亡くなった北宋の人である。

追和歌について、

「追和」とは先人の詩歌に対して何らかの同情・共感を後の人が覚えて和したものをいう。もちろんこのようなことは中国で起こったもの(橋本達雄「大伴家持の追和歌」『万葉集を学ぶ』第八集)

追和と題する詩は『文選』詩編にも、『玉台新詠』にも『唐詩選』にも見えない。「和す」と題する詩は『文選』詩編に……七例あり……『玉台新詠』には、……三十一例あり、『唐詩選』には……二十八例ある……「和詩」はすべて人の詩に「和」したものである。(小野寛「万葉集追和歌覚書」『論集上代文学第十八冊』)

の言及がある。

「追和歌」という表現が万葉集中に現われたのは

山上臣憶良の追和する歌一首

翼なすあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ

(2・一四五 憶良)

で、持統四(六九三)年の作歌である

この初出以降の追和歌の例は、一四例ありそのうち家持が五例である。

「旅人と憶良を中心とした大宰府歌壇の人々と家持、この両者以外には追和歌は試みられなかったようだ。従ってこの「追和」という行為は万葉歌人にとってかなり特殊なものであった筈だ。

この十四例をくわしくみると、同じ追和歌であっても大宰府歌壇の人々と家持との間には明らかに差異が認められる。大宰府歌壇の人々の追和が宴席等での風流な歌遊び―後世の連歌とも似かよったものであるの―に対して家持のそれは古歌等によって詩的感興をかきたてられた、あくまでも家持個人に由来するものであった」と大越嘉文氏は考察する。

加えて「追和」について、家持の「追和」が確実に中国の影響を受けているとはいえないという中尾健一郎氏の指摘を挙げておく。

五、卷一七 大宰府関連歌群に始まる家持の歌日誌

家持は、歌日誌ともいうべき万葉集末四卷の卷一七巻頭に左記のように大宰府から上京する羈旅歌群を選ぶ。そして天平一〇年

の家持作歌の七夕歌一首、次に天平一二年の先の追和歌六首が続くのである。

また家持は、父旅人と歌を競い合った山上憶良の歌に影響を受けた和歌を残す。家持にとって大宰府や梅花の宴への思いは歌を詠む時の原点のような記憶であったのかもしれない。

○卷十七巻頭歌群

天平二年十一月庚午大宰師大伴卿大納言に任ぜられ京に上る時に、けんじち 僭従等別にうづつち 海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲傷し各おのもち 所心を陳べる作る歌十首

我が背子を我が松原よ見渡せば海人娘子ども玉藻刈る見ゆ

(17・三八九〇 三野連石守)

以下、けんじち 僭従等作者未詳歌三八九一―三八九九まで九首あり。

世間の無常を悲しぶる歌一首 併せて短歌

あめつち 天地の遠き初めよ 世の中は 常なきものと 語り継ぎ流  
らへ来れ 天の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり  
あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにはひ 秋付  
けば 露霜負ひて 風交じり 黄葉散りけり うつせみも か  
くのみならし……常もなく うつろふ見れば にはたづみ 流  
るる涙 留めかねつも

(19・四一六〇 大伴家持 天平勝宝二年 三十三歳)

## 五、結び

言問はぬ木すら春咲き秋付けば黄葉散らくは常をなみこそ  
うつせみの常なき見れば世の中に心付けずて思ふ日そ多き  
(19・四一六一 同右)

(19・四一六二 同右)

この長歌は、「世間の住み難きことを哀しむる歌」(5・八〇四長歌 八〇五反歌)の山上憶良の大作の影響を受けている。また、

勇士の名を振るはむことを慕ふ歌一首併せて短歌

ちちの実の 父の命 ははそ葉の 母の命 おほろかに 心尽  
くして 思ふらむ その子なれやも ますらをや 空しくある  
べき……後の世の 語り継ぐべく 名をたつべしも  
(19・四一六四 家持 同右)

ますらをを名をし立つべし後の世に聞き継ぐ人も語り継ぐがね  
(19・四一六五 同右)

右の二首、山上憶良臣の作る歌に追和す

の長歌短歌の追和歌は、山上憶良の、

土やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして

(6・九七八 憶良 天平五年頃)

の歌に追和したものである。

大宰府で父旅人が成した歌壇結成の試み、その最大のものとしての梅花の宴は、少年家持の歌人としての第一歩から影響を及ぼしていた。時経て家持に歌人としての自覚が芽生えるとともに、振り返る原点として存在感を深めていったのではなかるうか。

梅花の宴の歌の影響は、まず初作歌に見られ、さらに巻一七以後の家持および家持周辺の人々の歌を配した、のちに大伴家持の歌日誌と称される万葉集末四巻で色濃く浮上してくる。さらに言えば、越中国守として赴任後、大伴池主との贈答歌のやりとりは旅人と憶良の關係に似ており、筑紫歌壇を擬えるように越中歌壇を積極的に形成するなど、大伴家持の歌人としての軌跡に梅花の宴および筑紫歌壇の在り方は深く染み込んでいると言えよう。

### 注

(注1) 小野寛編著『万葉集をつくった大伴家持大事典』(笠間書院 二〇一〇年一月)

(注2) 橋本達雄『大伴家持 天平の孤愁を詠ず』(集英社 一九八四年十二月)

(注3) 武田祐吉『萬葉集全註釋 七』(角川書店 昭和三二年九月)

(注4) 大越嘉文『追和二太宰之時梅歌「新歌」考』(國學院大學大学院文学研究科論集第十一号)

(注5)

梅光学院大学第三〇三回日本文学会で「大伴家持と梅花の宴」を研究発表した後、中尾健一郎氏から、初唐以前の中国にも「追和」と思しき用例があるとの指摘を受けた。同氏によれば、南朝陳の陰鏗(生卒年未詳)に梁元帝(五〇八〜五五四)の「登江州百花亭懷荆楚詩」(『藝文類聚』卷二八、人部・遊覽所引)に唱和した「和登百花亭懷荆楚詩」(同前)があり、『文苑英華』卷三二五は詩題を「追和登百花亭懷荆楚」に作る。『文苑英華』所収の梁元帝詩には、「以下三篇並見江州石本」(以下三篇、並びに江州の石本に見ゆ)の注記があり、『文苑英華』に収める元帝、朱超道、陰鏗の三者の詩は北宋以前の拓本に由来することがわかる。しかしテキストの問題もあり、また家持が行っているような先人を偲ぶ内容の「追和」とは異なるので、これを家持以前の用例としてあげるのは少し無理があるという。

万葉集の引用は『新編日本古典文学全集 萬葉集』に拠る。